



**Data**

監督・脚本：三宅唱  
 原作：佐藤泰志『きみの鳥はうたえる』（河出書房新社/クレイムン刊）  
 出演：柄本佑/石橋静河/染谷将太  
 /足立智充/山本亜衣/渡辺真起子/萩原聖人

## 👁️👁️ みどころ

佐藤泰志は私と同じ1949年生まれ作家だが、柴田翔や高橋和巳、真継伸彦ほど有名ではない。しかし、その原作は、①『海炭市叙景』（10年）、②『そのみにて光輝く』（14年）、③『オーバー・フェンス』（16年）が素晴らしい監督と素晴らしい俳優陣で映画化され、4作目として本作が誕生！毎回見られる“はみ出し者”の男2人、女1人による“青春群像劇”は、お勧めできるものではないが、瑞々しさは素晴らしい。

若者は誰しも、山口百恵ほどではなくても“ひと夏の経験”を持つもの。彼女との“初エッチ”から始まった、函館での“ひと夏の経験”は意外な結末で終わるが、この経験は「僕」にいかなる変化をもたらすのだろうか？

優等生的な生き方とは異質の“はみ出し者”の生き方は、“フーテンの寅さん”とは違う意味で、今を生きる若者の大きな参考に・・・？



## ■□■佐藤泰志の小説の映画化は4作目に！■□■

私と同じ1949年生まれで函館出身の作家、佐藤泰志は1990年に41歳で自ら命を絶ったが、それは一体なぜ？私は熊切和嘉監督の『海炭市叙景』（10年）を観ていないが、『海炭市叙景』、呉美保監督の『そのみにて光輝く』（14年）（『シネマ32』166頁）、山下敦弘監督の『オーバー・フェンス』（16年）（『シネマ38』66頁）が次々と「佐藤泰志3部作」として製作・公開され、大ヒットしたのは一体なぜ？また、佐藤泰志作品は必ず2人の男と1人の女が登場する青春群像劇だが、それが「はみ出し者の青春群像劇」と呼ばれているのは一体なぜ？さらに、①『海炭市叙景』では竹原ピストル、加瀬亮+谷村美

月、②『そのみにて光輝く』では綾野剛、菅田将暉+池脇千鶴、③『オーバー・フェンス』ではオダギリジョー、松田翔太+蒼井優、という素晴らしい若手俳優3人が出演し、④本作も1978年生まれ若手監督、三宅唱が起用されると共に、「僕」役で柄本佑、静雄役で染谷将太、佐知子役で石橋静河という旬で演技達人な俳優が出演し、熱演しているのは一体なぜ？

ちなみに、『きみの鳥はうたえる』とは何とも奇妙なタイトルだが、ネット情報によればこれはビートルズの『And Your Bird Can Sing』からつけられたものらしい。しかし、原作ではビートルズのそのレコードとその歌がそれなりの意味を持つストーリーになっているらしいが、本作ではそんなシーンは全く登場しないので、なぜ原作のタイトルをそのまま維持したのかはよくわからない。また、ビートルズの楽曲を小説のタイトルとし、そのまま映画化されたのは村上春樹の『ノルウェイの森』（『シネマ25』未掲載）だが、私には同作はイマイチだった。しかし、本作は？なお、本作の評論については、是非『そのみにて光輝く』と『オーバー・フェンス』の評論を併せて読んでもらいたい。

## ■柴田翔『されど われらが日々』と文学比較してみると■

佐藤泰志が1981年に発表した『きみの鳥はうたえる』は第86回芥川賞候補となり、以降あわせて5回、同賞候補となったが、いずれも受賞に至らなかったらしい。それに対して、私が大学に入った1967年に触れ合うことになった最初の文学が、1964年に第51回芥川賞を受賞した柴田翔の『されど われらが日々』。これは、高橋和巳や真継伸彦らの作品と共に、学生運動の活動家“必読”の文学作品で、私は以降も、柴田翔の『贈る言葉』（66年）、『鳥の影』（71年）、『立ち盡す明日』（71年）等を熟読した。

1969年に東京大学文学部助教授となり、後に教授、文学部長も務めた柴田翔作品の登場人物に比べると、佐藤作品の登場人物は前述のように“はみ出し者”ばかりだから、その知的レベルはかなり低い。それは、書店でアルバイトをしている「僕」（柄本佑）のいい加減な働きぶりや、家賃をケチるため静雄（染谷将太）と安アパートで同居している私生活ぶりを見れば一目瞭然だ。しかも、静雄の方は目下、仕事にあぶれているようで、月末になるといつも誰かから借金しているようだ。佐藤泰志作品ではいつもこんな“グウタラな若者”が主人公だから、柴田翔作品の“知性豊かな主人公たち”とは大違いだ。

もっとも、そんな“はみ出し者”でも若者の性欲は旺盛だから、本屋のアルバイトではもったいないような美人の佐知子（石橋静河）から「僕」に対してちょっとしたモーションがかかってくると、たちまち「僕」はそれに乗って2人は意気投合。その日のうちに「僕」と静雄が同居するアパートの狭い二段ベッドで初エッチとなったから、なるほど、今ドキの若者のセックスは安易なものだ。ちなみに、ストーリーの進行を見ていると、佐知子は本作で唯一まともな大人のように見えた、店長の島田（萩原聖人）とうわさ通り“デキていた”そうだから、アレレ……。さらに、本作のメインストーリーは佐藤作品らしく男

2人と女1人の“絡み”となり、「僕」とエッチを繰り返しながらも佐知子の気持ちは次第に静雄に惹かれていくことに・・・。

なるほど、佐藤泰志の特徴である“はみ出し者の青春群像劇”は、日本共産党の「六全協」に影響された学生群を描いた柴田翔の『されど われらが日ター』とは大違いだ。

## ■□■舞台は？時代は？彼らの働き方は？■□■

本作は、生まれ故郷の函館を舞台とした佐藤泰志の原作の中で、唯一の例外で、その舞台は東京。そして、時代は1980年代らしいが、それは、静雄の数少ない持ち物の1つがビートルズのレコードだったことからよくわかる。しかし、柄本佑と同世代の1984年に札幌で生まれた三宅唱監督は本作の舞台を函館に移し、かつ時代も現代に移し替えた。そのため、本作には函館という地方都市の特徴がよく出ているとともに、何ゴトもスマホ（LINE?）で連絡を取り合う今ドキの若者の“生態”がよく出ている。佐知子はさすがに女の子だからある程度は喋るが、「僕」も静雄も口数が少なく、互いに無関心なのは今ドキの若者の最大の特徴だ。私ならとても耐えられそうにない、男2人の共同生活が快適に過ごせているのは、「僕」と静雄2人の現代っ子的“はみ出し者”性格のおかげだろう。

いつの時代も、若者はその時代を支配している者に反発し、自分の生き方を模索する“はみ出し者”。その典型が、現在NHK大河ドラマで放映されている『西郷どん』の時代だし、ある意味で1960年代後半の学生運動の時代だ。いずれもその時代のキーワードは“変革”だが、その時代を生きた若者も次第に大人になり、社会の中で自分で稼ぎ、妻子を養うようになると・・・。

来年1月に70歳になる私には、本作にみる「僕」や静雄、そして佐知子たちの働き方、ハッキリ言えばそのいい加減ぶりやばみ出しぶりには、いささか疑問と異論がある。「僕」や「僕」の少し先輩ながら、これもケツタイなバイト男、森口（足立智充）のような若者を、我慢しながらアルバイトとして使わざるを得ない店長の苦勞に共鳴するところが多いわけだ。今年の国会では「働き方改革」が大いに議論されたが、本作のような若者の働き方を見ていると、どうしても私には、これでは日本の将来は・・・?と覚えてしまうが、さて・・・?

## ■□■毎晩酒を飲み、ビリヤードで遊ぶ生活をどう考える？■□■

本作中盤は、貧乏ながらも毎晩酒を飲み、カラオケやビリヤードで遊び回る「僕」、静雄、佐知子の姿が描かれる。飲んだ翌日の無断欠勤も平気だから、店長はやってられないと同情してしまうが、「僕」にしてみれば「それがどうしたの・・・」ということらしい。また、その場しのぎのウソも達者だから、「僕」はあながち頭が悪いわけではなさそうだ。他方、佐知子がカラオケで歌うのは新作バージョンの『オリビアを聴きながら』だが、今ドキの

若者はカラオケではあれぐらい真面目なの？私がいつも楽しみに観ている堺正章が司会する「THEカラオケバトル」では、実力ある若者が日本中にいくらでもいることがわかるから、頼もしい限り。ひょっとして佐知子もそんな予備軍の1人・・・？それはそれで頼もしい限りだが、若い時にホントにこんな生活でいいの？

私の大学時代は貧乏のレベルでは「僕」、静雄2人と同じようなものだったが、学生運動と、それを卒業した後は司法試験の受験勉強に忙しく、酒を飲んだりカラオケに行ったりするヒマはほとんどなかった。そのため、私は本作のスクリーン上でみる3人の男女が毎晩遊び回る姿にビックリ！

ちなみに、『素敵なダイナマイトスキャンダル』（18年）は、昭和の激動期をエロ雑誌の編集者として生き抜いた末井昭氏の「爆発的生きざま」を描いた面白い映画だった（『シネマ41』88頁）が、彼が若い時の“ダサイ人生”で得た宝は私と同じく仲間・親友・同志だ。そんな彼なら、本作にみる「僕」、静雄、佐知子たちの毎晩酒を飲み、ビリヤードで遊ぶ生活をどう考えるのだろうか？

## ■□■函館の“ひと夏”はいつまで？若者の変化は？■□■

2018年の夏は“危険な暑さ”と言われ、文字通りの“酷暑”が続いているが、夏の高校野球が終わり、お盆を過ぎると、暑かったひと夏も去っていくもの。小学生の頃、夏休みはメチャクチャ長く感じられたが、大人になるとひと夏が去っていくのはあっという間だ。そんな感覚が強いため、“ひと夏の思い出”はしばしば歌のテーマになる。その代表曲は、山口百恵のヒット曲『ひと夏の経験』（74年）だが、辺見マリの『経験』（70年）や谷村新司の『22歳』（83年）もそうだ。

ところが、東京や大阪と比べると、もともとと長くないはずの函館のひと夏も、冒頭の「僕」のナレーションによると、「毎日ダラダラ過ごしている僕にとっては、いつまでも長く続く夏だと思っていた」というから、ビックリ。なるほど、確かに毎日忙しい、忙しいと言いながら過ごしていると1日の過ぎるのが早い、のんびり過ごしていると1日はゆったり流れていくらしい。しかして、毎晩のように酒を飲み、カラオケやビリヤードで遊んで過ごす「僕」、静雄、佐知子たち3人のひと夏の経験と、それによる彼らの変化は？

本作は冒頭と中盤に静雄の母親、直子（渡辺真起子）が登場し、静雄や「僕」とわかったようなわからないような会話を交わすが、ある日、この母親が病気で倒れたというニュースを聞いて静雄が病院に駆けつけてみると、その結果は・・・？また、「僕」たちの昼間の活動の主な舞台になるのはバイト先の書店だが、そこでは店長と佐知子との腐れ縁が切れたり、「僕」と森口の“対決”が面白い形で解決したりと、さまざまな人間ドラマ（？）が展開していくから、その変化は大きい。さらに、最大の変化は、本作の導入部が「僕」と佐知子との初エッチから始まったのに、函館のひと夏が終わる頃には佐知子は静雄と結ばれたばかりか、正式に恋人として付き合うと宣言する事態になっているから、アレレ・・・。

そして、「僕」はそんなことはお見通しのように達観し、佐知子が誰とエッチしようが、誰と付き合おうが、佐知子の自由だよと言っていたから、私は逆に、今ドキの若者はえらいものだと感じていたが、何のことはない、本作ラストでは・・・？

「ひと夏の経験」は、誰でも若い時にあるもの。また、後から考えると、それが重大な転機になったとわかることもあるものだが、さて、本作の主人公である「僕」にとっての函館の短いひと夏の経験が及ぼした変化とは？佐藤泰志の青春群像劇も70歳近くになって観れば感動が薄くなるのは止むを得ないが、それを差し引いても本作の青春群像劇としての瑞々しさは素晴らしい。今の若者のみんなに本作のような生き方を勧めるわけではないが、やはり今ドキの若者の生き方の参考とすべき必見の映画であることは間違いないだろう。

2018（平成30）年8月15日記